

# 宮沢賢治研究と女性

信時哲郎

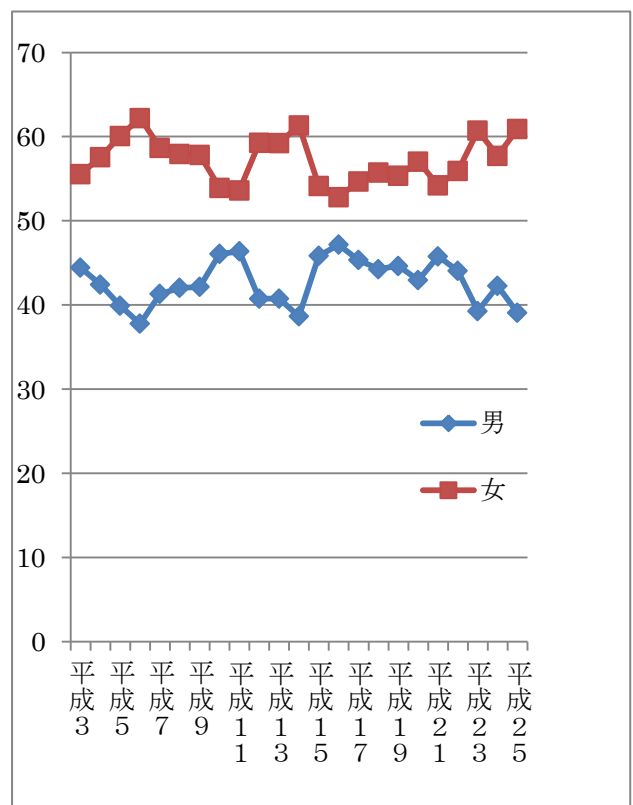
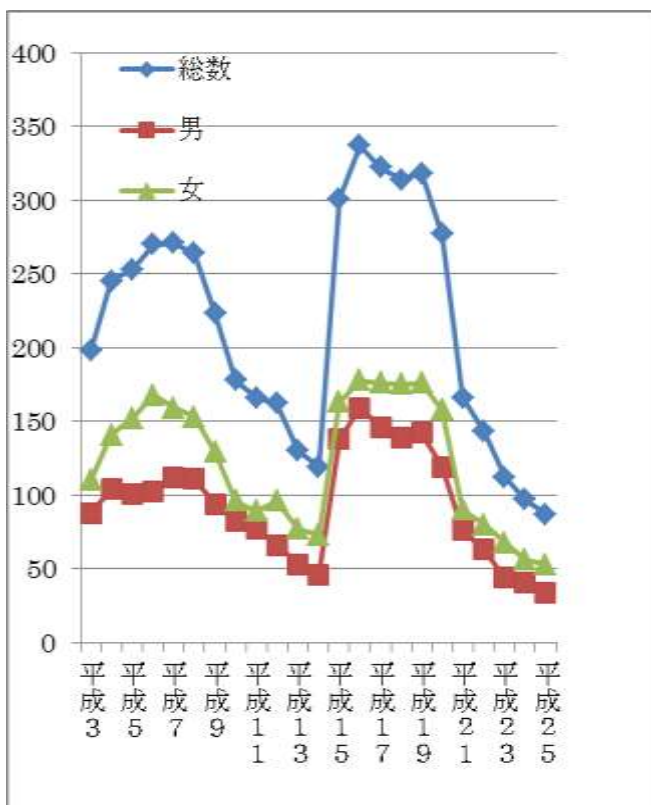
(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科)

## はじめに

私の出身校である上智大学文学部国文学科では女性と男性の比率が2対1。宮沢賢治を卒業論文に選んだのは私を含めた3名であったが、その内訳は、奇しくも女性2名と男性1名であった。これをもって賢治研究全体を考えるのは無理があるにしても、児童文学者・宮沢賢治を研究しようとする女性が多いような気がする。しかし実際はどうなのだろうか？ 文学への志向の増減などと共に考えてみたい。

## 1 宮沢賢治学会イーハトーブセンター

宮沢賢治学会イーハトーブセンターは、平成2年9月に設立された団体で、規約には「本会は、宮沢賢治とその作品を研究並びに愛好する者が交流し、相互に理解を深めることを目的とする。また、宮沢賢治に関する資料・情報のセンターとする」とある。花巻市からの財政的な補助を受けながら会費収入(年額3000円)もあり、作家の個人研究会と一般のファンクラブの中間的な存在で、そこに市も関係するといった感じである。作家・詩人の研究会というと大学教員や大学院生を中心とした学術組織がイメージされそうだが、宮沢賢治学会イーハトーブセンターは大きく性格が異なる。毎年、「宮沢賢治研究 Annual」という学会誌を出しており、最高度の論文が掲載されている一方、ファンクラブ通信のようなカラーのブックレットも年に2回刊行している。そうした「学会」であるから、事実、2013年8月のデータによれば、小学生会員14名、中学生会員14名、高校生会員16名、大学生会員45名となっている。会員のうち岩手県民が308名(20.8%)、うち花巻市民が175名(11.8%)となっているのも、他の作家研究会とは異なると思われる。会員数は賢治生誕百年の平成8年には3000人を越えていたが、この後は下降の一途をたどり、現在は最盛時の半分であ

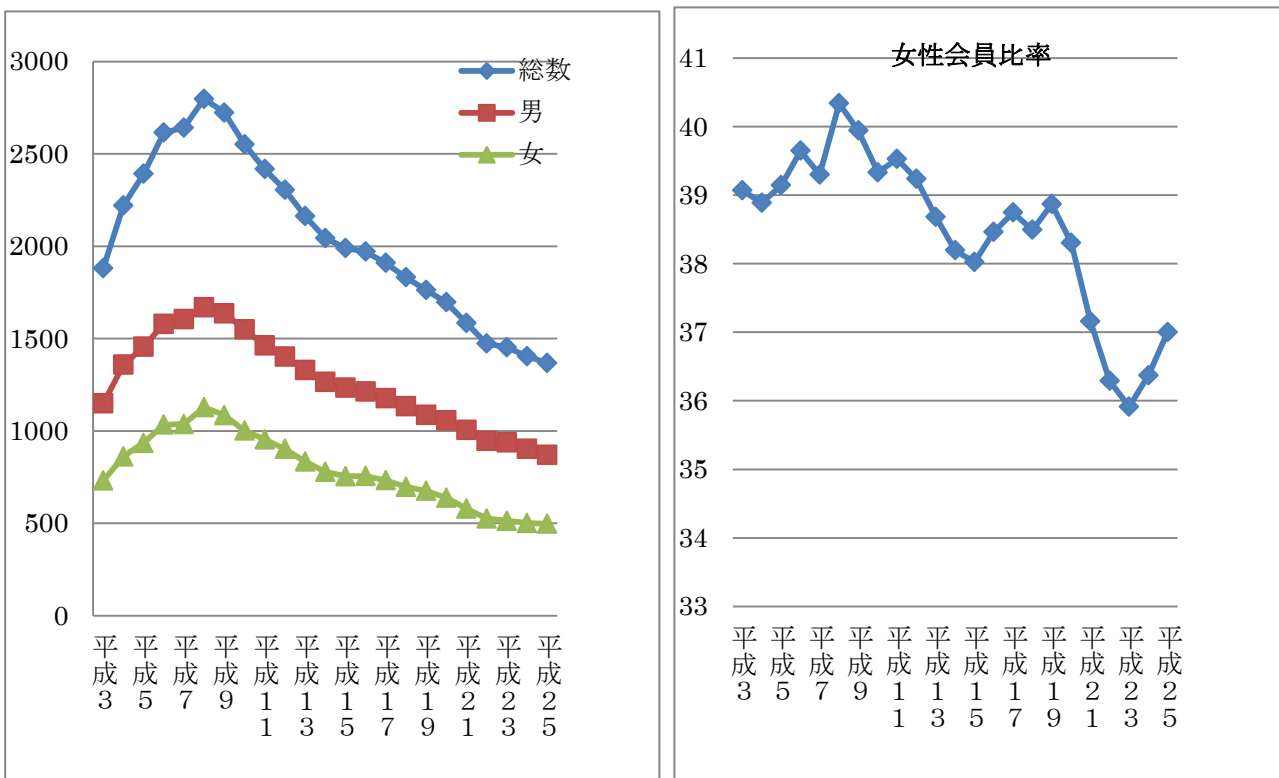


る約1500人。生誕百年後に会員数は急降下したが、ようやく落ち着いた状況となっている。

はじめに前ページに掲げた同会の学生会員数と学生会員男女比率を見ていきたい（平成2年のデータは不完全なために省いた。また団体会員も省いている）。学生会員に限っては、生誕百年めの平成8年より平成14年の会員数増が顕著だが、それ以上に平成15年からの急上昇が目につく。この時期には花巻市の会員数も急増していることから、花巻市内の小中学校での行事やキャンペーンのようなものの影響だと思われる。しかし、年次進行して彼らが高校生や大学生となると、それまでは無料だった会費が有料になることもあって（ただし学生会員の会費は一般会員の半額）、平成21年頃にはすっかり落ち着いた数字に戻ってしまっている。しかし、男女比率に関しては全期間を通じて女性人気が高いようで、賢治は女性に人気があるという、「はじめに」に記した漠然とした印象を裏付ける結果となっている。

しかし、次に掲げる一般会員について見ていくと、今度は一貫して男性の割合が高い。生誕百年の平成8年に会員数がピークに達しているが、注目すべき点としては、この年に女性会員の占める率が40%を超えていることだろう。この時の賢治ブームについては新聞や雑誌で報じられることも多かったが、ブームを支えていたのが、実は女性であったのではないかと感じさせるものとなっている。

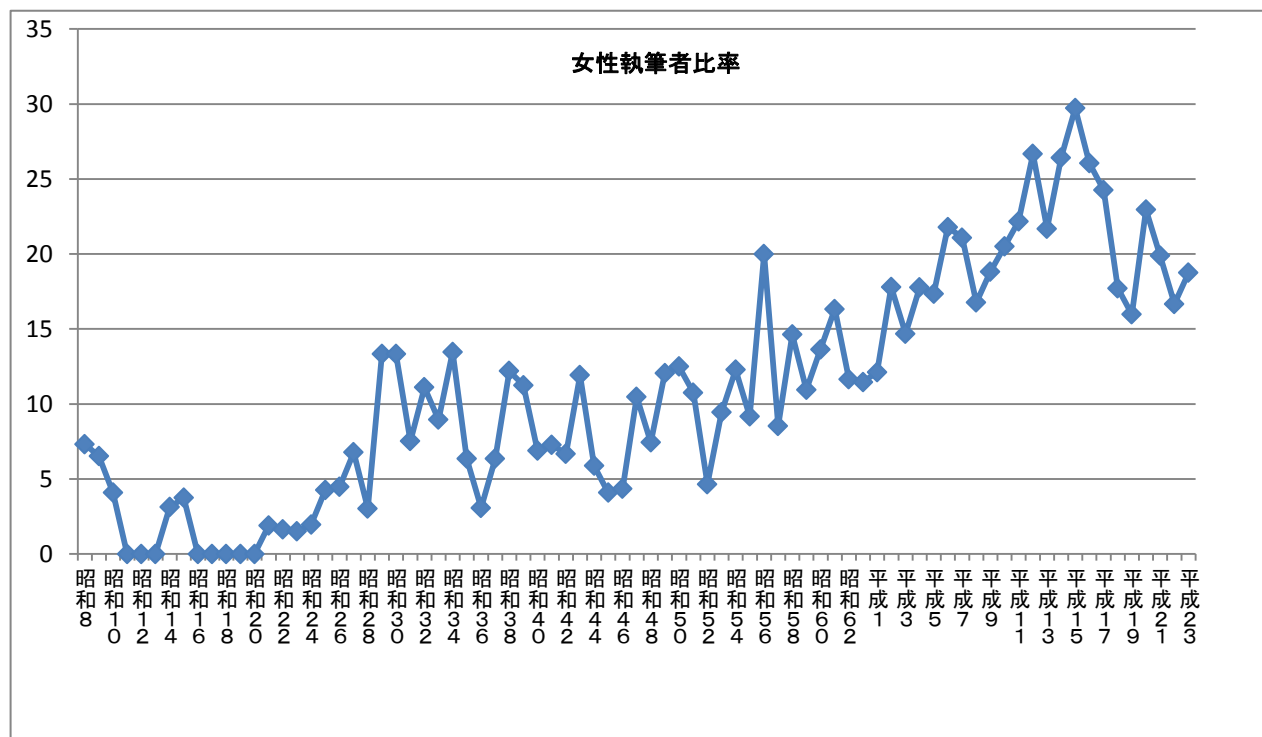
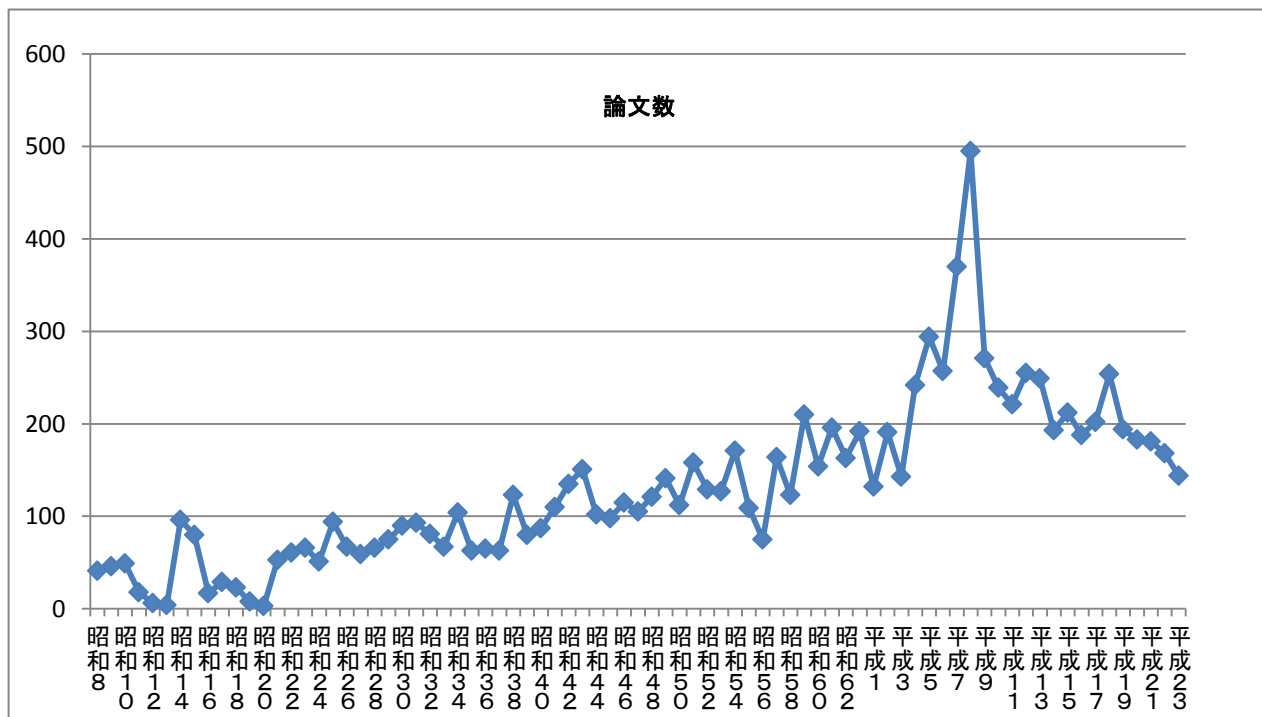
また、平成16年から数年間は一般の女性会員比率も上がっているが、これは先に見た学生会員数の増加とほぼ一致していることから、小中学校の女性教員や母親が子どもと一緒に参加したのではないかと思う。



さらに平成24年と平成25年に女性会員比率が上昇していることも目につく。平成23年には東日本大震災が起こったが、震災の報道とともに賢治の「雨ニモマケズ」がテレビを初めとするマスコミを賑わせたのは記憶に新しいところで、これに平成25年4月から放送開始されたNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」の人気の拍車をかけたのではないかと思う。個々の状況はわからないものの、平成8年と似てグラフの変化が著しいことから、時代の風潮やメディアの影響は、特に女性たちに大きく影響を及ぼしているのではないかと思われる（逆に男性たちが賢治に関する報道や特集に批判的であったと解せるかもしれない）。

## 2 宮沢賢治関連論文から

続いて、宮沢賢治関連論文（書籍を含む）の数と女性比率について見ていきたい。筆者は賢治関係論文のデ



データベースを作っているが、論文数は生誕百年の平成8年には495件と図抜けた値でピークになっている<sup>1</sup>。その他には昭和56年には論文数が減っており、平成18年に論文数が少し増えているのが目立つが、今、思いだしてみても、特記すべきできごとはなかった年であるように思う。

しかし、男性執筆者と女性執筆者に分けて集計して見ると、いくつか気になる点が見えてきた<sup>2</sup>。まず論文総数が多い生誕百年めの平成8年には女性の執筆率が急減していることだ。また、論文総数が上がった平成18年には、やはり生誕百年の時と同じように女性の執筆率が減っている（平成19年はさらに減っているのだが）。

<sup>1</sup> <http://www.konan-wu.ac.jp/~nobutoki/kenjironbun.html> 2014.1.31 最終確認

<sup>2</sup> 男性名と女性名を文字だけから完全に見分けることは、残念ながら不可能だと言うしかない。筆者が性別を知っている場合のほかは、掲載雑誌やタイトルから、そして名前から受ける印象というきわめて曖昧な判断によるものだという断りしておきたい。西欧語以外の外国人名は、写真や同名の人物をネットで検索して男女を推定するといった方法を取っている。団体はデータから省いている。

その一方、論文数が減少した昭和56年には女性による論文の比率が20%と高くなっている。つまり論文総数と女性の執筆率は反比例しているようなのである。例えば生誕百年の際には、多くの雑誌や論文集などで賢治が扱われ、多くの人が自ら進んで原稿を書き、また、原稿が依頼されたと思われるが、その際に声をかけられた女性研究者の数は、男性に比して圧倒的に少なかったということではないかと思う<sup>3</sup>。

賢治学会の会員数と女性比率を見ると、女性の方が社会情勢や流行に敏感だということになったが、論文の執筆に関して言えば、男性の方が社会情勢や流行に左右されるということのようだ。

また、論文総数が減少の一途をたどっていることは確かなようだが、女性の論文執筆率が次第に上昇していることも確実であるように思う。平成15年には女性の執筆率がピークに達しているが、学校基本調査によれば、人文系の大学院進学者数が平成元年と比べて平成10年には倍になっており、その中には多くの女性がいたであろうことを思えば、納得のいく結果である。平成15年のピークの後、女性の執筆率は下がっているが、それでも平成10年代に到達した20%程度の比率はこのまま保ち続け、今後は上がることはあっても、研究者の数も多くなっていると思われるため、これより下がることはないように思われる。

### 3 文学部・日本文学（系統）学科の卒業論文

それでは大学の卒業論文は、どうなっているのだろうか。甲南女子大学図書館に収蔵されている大学紀要から卒業論文リストのあるものを選び、近代文学研究の論文がどれくらいあるか、そしてその中で賢治の論文がどれくらいあるのかを調べてみた。

人数が少なすぎず・多すぎないところと思って、関東からは実践女子大学、青山学院大学、上智大学の3大学を選んだ。中部からは愛知淑徳大学（平成10年度卒業生までは女子のみ）。関西からは京都女子大学を選んだ。はじめは共学大と女子大の違いがあるかとも思ったが、共学大における男性の数が少なく、まして賢治研究をしている男性となると数が少なく、今回調査した範囲ではとても有意なデータとはなりそうにないため、この項では男女比について考察することを断念した。

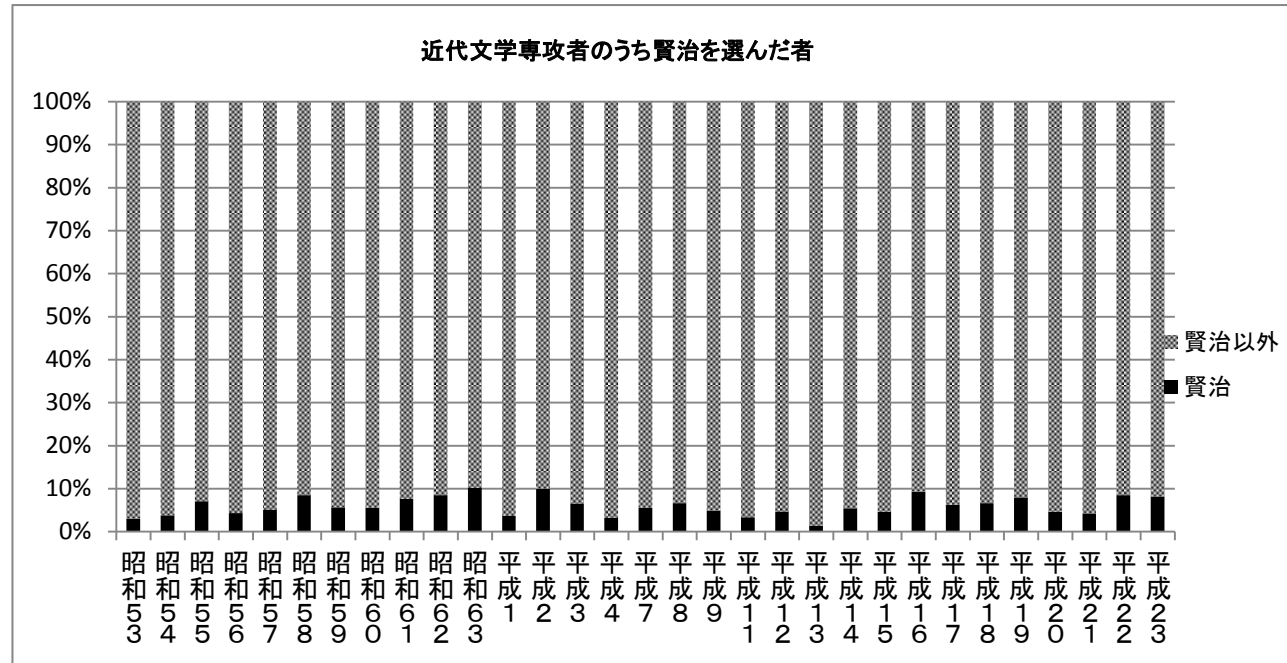
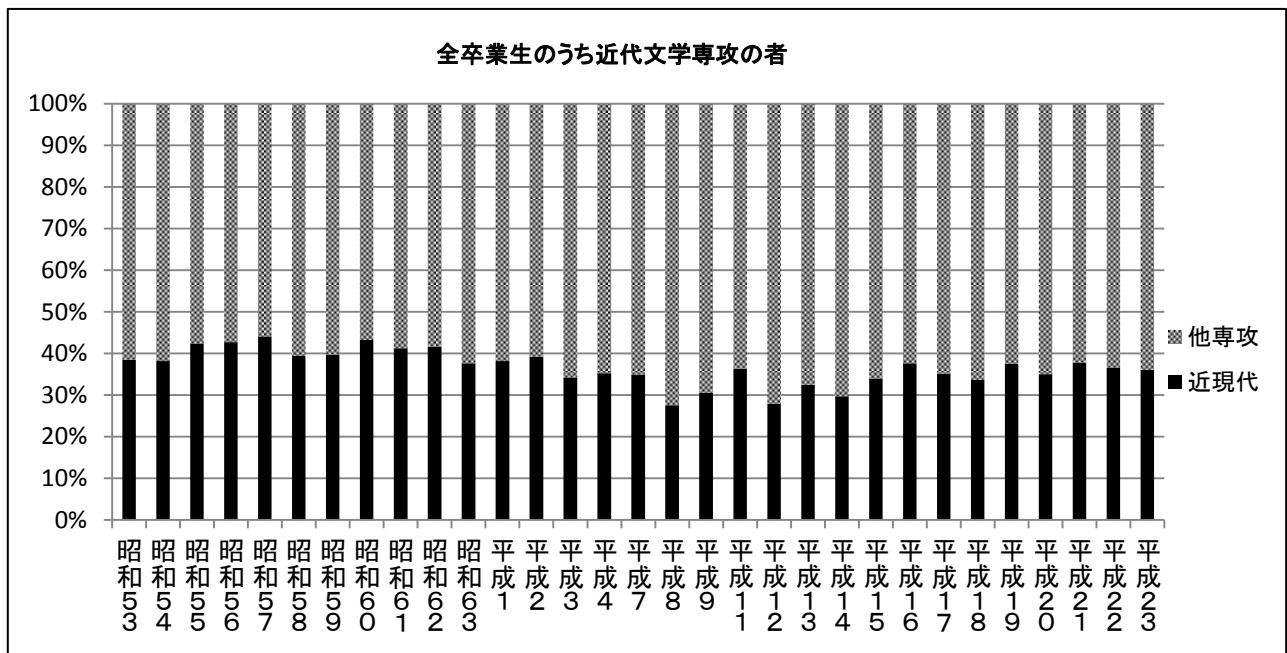
しかしデータを打ち込んでいるうちに、この他にもさまざまな問題が含まれていたことに気付かされた。近代文学と中古文学の比較、近代文学の国語学的な分析などがあるだろうことは、あらかじめ予想していたが<sup>4</sup>、たとえば近代文学を担当するスタッフ（ゼミ）の数が多ければ、人数調整のためにもやむなく近代専攻に回される学生もいたかもしれないということだ。逆に近代を専攻したかったのに、人数調整で他に回された学生がいた可能性もあろう。また、近代文学への興味ということではなく、担当教員の人間的な魅力によって専門を決める場合も多かったかもしれないし、「楽勝」という評判を聞きつけて担当教員を選ぶ場合もあったかもしれない。J-POP歌詞という「詩」をテーマとして認めていたり、マンガやアニメという「文学作品」をテーマとして認めているところもあり、そうすると、いわゆる従来どおりの近代文学専攻者のイメージからはだいぶ離れてくるように思う。こんな風に考えると、どれだけ精度を上げて調べようにも調べようがない。

賢治研究を扱った者の人数についても複雑で、例えば実践女子大学には賢治研究者として著名な栗原敦がおり、京都女子大学にはやはり賢治研究者として著名な工藤哲夫がいるが、だからといって必ずしも学生たちが教員の研究対象を扱うわけではないようだ。ゼミ担当者が賢治研究者であるからこそ、賢治だけは敬遠したいという学生もいたであろう。また、賢治研究を専門にしていない教員でも、ゼミでは徹底的に賢治を読み込んで、卒論では半強制的に賢治について書かせようとした場合もあるかもしれない。

しかし、これら5大学を総合した結果については、欠年もあるにせよ、何らかの傾向を示してくれるのではないかと考えてグラフにしてみた。

<sup>3</sup> 女性研究者と書いたが、これがそのまま賢治プロパーの研究者の男女比率を示すものとは言えない。というのは、これも賢治論文の特質かもしれないが、ここにカウントされている論文の全てがいわゆる賢治研究者による学術論文ではなく、他分野で活躍する学者や映画監督、漫画家、俳優のエッセイ的なものも多く含まれているからだ。ゆえに、この男女比率は賢治研究者の男女比率であるというよりも、文化人の男女比率を示すものだった方が正確かもしれない。

<sup>4</sup> 明らかに近代文学以外に重点が置かれている場合はカウントせず、その他は近代文学研究としてカウントした。



実践女子大学（昭和45年～平成24年、H6なし）

全卒業生のうち近代文学専攻の者（昭和40.9% 平成34.7%：総合37.5%）

近代文学専攻者のうち賢治を選んだ者（昭和7.1% 平成6.0%：総合6.5%）

青山学院大学（昭和44年～平成24年、H10なし）

全卒業生のうち近代文学専攻の者（昭和45.7% 平成37.0%：総合41.0%）

近代文学専攻者のうち賢治を選んだ者（昭和4.3% 平成4.6%：総合4.4%）

上智大学（昭和43年～平成23年、H5なし）

全卒業生のうち近代文学専攻の者（昭和44.6% 平成38.0%：総合41.2%）

近代文学専攻者のうち賢治を選んだ者（昭和2.0% 平成2.3%：総合2.2%）

愛知淑徳大学（昭和53年～平成24年）

全卒業生のうち近代文学専攻の者（昭和42.0% 平成36.2%：総合38.0%）

近代文学専攻者のうち賢治を選んだ者（昭和4.6% 平成4.7%：総合4.7%）

京都女子大学（昭和29年～平成23年）

全卒業生のうち近代文学専攻の者（昭和25.2% 平成27.2%：総合26.0%）

近代文学専攻者のうち賢治を選んだ者（昭和5.5% 平成7.3%：総合6.2%）

総合（昭和43年～平成23年、H5・6・10なし）

全卒業生のうち近代文学専攻の者（昭和40.8% 平成34.5%：総合36.7%）

近代文学専攻者のうち賢治を選んだ者（昭和6.3% 平成5.6%：総合6.0%）

グラフを見る限り、近現代文学専攻者はわずかず減少しているようにも感じられるが、賢治研究についてはバラつきはあっても、特に増減があるようには感じられない。平成8年の生誕百年の年にも、卒論に関して言えば、特に大きな影響もなかったようである。

#### 4 文学部・日本文学（系統）学科のおかれた位置

しかし、3章の結果をもって、大学における近代文学や賢治研究に大きな変化がないと思ってしまっただけなのではないだろうか。大学や短大における日本文学（系統）学科の数や人数がどう変わっているかについても考慮に入れなくてはならないからだ。

筆者がかつて勤務していた神戸山手女子短期大学は、昭和35年に国文学科が創設され、一時は在籍者も1学年で200人を超えていたが、平成18年にはキャリア・コミュニケーション学科に改組され、日本文学科的な色彩はほとんど消えてしまった（平成16年には男女共学となって名称も神戸山手短期大学に改称）。

現在勤務中の甲南女子大学も国文学科は昭和39年の大学開設時からの伝統ある学科で、現在も日本語日本文化学科と改名しながら健在だが、学科名称からは「文学」の文字が消え、「ホスピタリティコース」「コミュニケーションコース」「現代視聴覚文化コース」「日本語日本文化コース」の4つのコースからなる学科に変貌を遂げている（甲南女子大学短期大学部は平成14年に廃止）。少子化と大学進学率の増加、そして女子学生における教養系学科の人気低迷と実学系学科の人気増などが影響しているのだ。

ただ、晶文社の『大学受験案内』のバックナンバーを国会図書館に向いて調べてみたところ、私立大学における日本文学（系統）学科（専攻）の数は、平成4年には114であったものが、平成24年には138と増加していることがわかった。ここには1大学で2専攻をもつものが14校、3専攻をもつ大学が1校含まれているが、重複分を差し引いても122となり、わずかではあるが増加していることが確認できる。しかし、現場にいる人間として志望者の増減や学生たちの関心を見聞きする限り、日本文学的なものが求められているとは、残念ながら思えない<sup>5</sup>。実際、旧来の教養系・文学系の科目は、現在の勤務校にかぎらず圧縮されているように感じられるので、大学における日本文学（系統）学科（専攻）が増加している理由としては、おそらく短大から大学への改組、あるいは専任教員数の関係等で改組や新設がなされたためだと思われる。そもそも全国の私立大学の40.3%で定員割れが起こっているということを考えれば<sup>6</sup>、これらの学科（専攻）のうち、定員を充足させている大学がいったい何校あるのかも疑わしい。いずれにせよ学生のニーズよりも大学側の必

<sup>5</sup> 三浦展『愛国消費 欲しいのは日本文化と日本への誇り』（徳間書店：2010）によれば、いわゆる愛国的・右翼的なイデオロギーとは別に、日本的なものが愛される傾向が近年の若い層には顕著だという。たしかに日本のおもてなし文化やジャパニカル、着物の着付け、日本食等に興味を持つ学生は増えたように感じるが、従来の日本文学への評価や日本文学（系統）学科の志願者数には、ほとんど結びついていないように思う。

<sup>6</sup> 日本私立学校振興・共済事業団「平成25(2013)年度 私立大学・短期大学等入学志願動向」  
(<http://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukou25.pdf>)

要性からこのような数字が出ているように思われる。

短期大学については日本私立学校振興・共済事業団の「私立大学・短期大学等入学志願動向」を調べてみたところ、平成25年の国文(学)科(表記は同報告に基づく)開設校は3校で、入学者は142人であった<sup>7</sup>。短大の数も平成5年には494校だったのが20年後には323校に減っているという。142人といえば、かつての短大一学年分にも満たない。しかし、各短期大学のHPを見たところ、たとえば平成25年の青山学院女子短期大学の現代教養学科の日本専攻の入学者は165名、実践女子短期大学の日本語コミュニケーション学科の入学者は109名であったから、「私立大学・短期大学等入学志願動向」がカウントする「国文(学)科」は、狭義の国文学科を指しているようである。ただし、名称を変えながら存続している短大の数も、決して多いと言えるような数ではないようだ。

教養系・文科系の短期大学といえば、事実上、女子短期大学を意味していたわけだが、大学への改組によって生き残りができたとしても、教養系・文学系科目は一時期に比べてかなり圧縮されていると思われ、そこで勤務する教員も、おそらくは「文学の先生」としてよりも「国語の先生」としての出番が多くなっているのではないだろうか。従って日本文学系の教員が退職した後は、もう文学系の教員が補充されることはなく、おそらく実践的な科目の教員が赴任してくるのではないかと思われる。もちろん中学・高等学校の「国語」が好きだった学生たちの受け皿として、また、国語科の教員免許を取得する機関として日本文学(系統)学科に底堅い人気があるのも事実だが、女性の高等教育の定番的な存在であった日本文学(系統)学科の地位が根底から揺るがされているのは確かだろう。かつて卒論を書くためには必ず参照せよと言われた雑誌「国文学 解釈と教材の研究」(学燈社)や「国文学 解釈と鑑賞」(至文堂/ぎょうせい)が、近年、相次いで休刊となったが、それもやむを得ないことであったのだということに改めて気づかされる。

ちなみに宮沢賢治を主な研究対象としている筆者のゼミだが、近年は卒論の対象を近現代文学から近現代日本文化に大幅に拡大させている。平成25年度の卒業論文題目をあげれば次のとおりである。

スポーツ漫画における女性キャラクター 役割の変化を通して  
淡路島の農業 神代家を中心に  
芸能界を目指す少女たち  
女性アイドルについて アイドルとファンの両方の視点から  
クレヨンしんちゃん映画論 社会の移り変わりとその影響  
まゆみクラシックバレエスタジオ 過去・現在・未来  
ゲーム「ポケットモンスター」における世界観・キャラクター設定について  
犬との共存 ペットから家族へ  
インターネット通販 利用者へのインタビュー  
腐女子の視点から見る『SLAM DUNK』  
兵庫県芦屋市におけるケーキ店  
コンビニ進化論 スイーツを中心に  
宇宙飛行士への夢 宇宙兄弟から考える

比較のために平成10年度の神戸山手女子短期大学国文学科での卒業論文題目をあげれば、次のとおり(この年は「銀河鉄道の夜」を下書稿から読み、その中から個々に興味のあるテーマを選んで論文を書かせた)。

銀河鉄道の夜 ジョバンニはなぜ乗ったのか、なぜ乗せられたのか  
「銀河鉄道の夜」 リンゴについて

<sup>7</sup> <http://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukou25.pdf>

『銀河鉄道の夜』 ジョバンニとカムパネルラの関係

銀河鉄道と星座の関係

宮沢賢治 銀河鉄道の夜

『銀河鉄道の夜』ほんとうのさいわいとは何か

銀河鉄道の夜

「銀河鉄道の夜」

「銀河鉄道の夜」 苹果のイメージをめぐって

『銀河鉄道の夜』天に召されるという事

なぜ「銀河鉄道」なのか

銀河鉄道の役割とは？

ジョバンニとザネリの存在

「銀河鉄道の夜」ブルカニロ博士の周辺

自己犠牲について

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』について 青年達の存在とは

<銀河鉄道の夜>ザネリの人物像

『銀河鉄道の夜』における蠍の神話の役割

「銀河鉄道の夜」における水のイメージ

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」ブルカニロ博士の言葉と実験

銀河鉄道の夜 カムパネルラの水死をめぐって

「銀河鉄道の夜」

「銀河鉄道の夜」 鳥捕りについて

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

『銀河鉄道の夜』での色彩効果

銀河鉄道の夜 二人はどのような体験で成長したか

『銀河鉄道の夜』 ジョバンニの人物像と登場人物の共通点

「銀河鉄道の夜」 りんごに託す想い

『銀河鉄道の夜』 選ばれたのがなぜジョバンニなのか

短大における1つのゼミの卒業論文（しかもゼミ生が29人！）にこれだけ宮沢賢治が並んでいた時代と今日を比べてみると、我がことながら驚かされるのだが、もちろん、こうした方向転換（転向？）は誰に強いられたというわけではなく、筆者自身の判断であり、このような変化が全国レベルで起っているというわけでもないだろう<sup>8</sup>。しかし、学生たちの自由意志に任せた結果として、いわゆる近代文学が選択されていないということは、つまり、これまでは近代文学が分不相応に高い場所に位置づけられ、権威づけられていたということを意味しているのではないかと思われる。

自虐的なことばかりを述べているように思われるかもしれないが、一抹の寂しさを覚えるのは事実であるにしても、これは当然の変化、起こるべくして起こった変化だと思う。かつては高等教育の受け皿として、女性たちは「教養を高める」という以外の選択肢がなく、その中で国文科か英文科のどちらか（あるいは家政科）を選ばなければならなかった。しかし、今日では女性たちの社会的な活躍の場所が増え、進路選択においても腰掛け就職、婿探し、行儀見習いとしてだけでなく、戦力として働くことが求められたためにキャリアを重視

<sup>8</sup> あまり文学研究をする意欲のない学生たちに文学の論文を強いるより、好きなものに取り組ませた方が、学生たちも生き生きと研究し、どこかの学会で発表してもよいのではないかと思うようなレベルにまで達する論文を書く場合も多い。国語科教員を目指していたり、大学院で文学研究の道に進もうとしているのであればともかく、大学生にとって必要な情報収集能力や情報処理力、論理的思考、コミュニケーション力等は、無理に文学研究をさせる場合よりも身につくと思っただけの判断である。



した学科を選択するようになったということだろう。そう思えばノスタルジーに浸って現状を逆恨みするよりも、社会全体が公平になってきていることを喜ぶべきではないだろうか。

このような状況の中で、自由意志で賢治学会に加入し、わざわざ会費を支払い続けてまで会員のポジションを守りたいという人間の数が減っていくのは自然なことだと思う。賢治学会の会員数は、小さな増減の波くらいはあるかもしれないが、大きな時代の流れからすれば、今後もさらに減少を続け、賢治に関する論文の数もさらに減っていくように思われる（ただし、先にも述べたように女性執筆者による論文の割合は増加していくと思われる）。これからは性別にも、制度や慣習にも左右されることなく、本当に研究したい者だけが研究するようになるのだろう。

ただ、賢治研究者の減少、あるいは日本文学（系）学科の人気凋落が、ただちに日本文化（日本発コンテンツ）の衰退を意味しているわけではないと思う。マンガやアニメ、ライトノベル、ゲームなどがクールジャパンとしてもはやされて久しいが、これらの愛好家たちが日本文学（系）学科への進路を選んでいないというだけであって、このように世界中からも注目され続ける日本文化は、衰退どころか、歴史上で最も繁栄しているとさえ言うことができると思うからだ。

しかし、今さらながら、人気分野を追いかけることが大学にとって、研究にとって、あるいは人類の文化にとっての最優先課題であるとは言えないと思う。文学・文化の研究者は、世の中の大きな流れから目を背けてしまってはならないが、自分の進むべき道についてはきちんと見据えながら、坦々と歩いていくべきであろうし、自分でもそのようにありたいと思う。